

# 「声の表現」 一声に出す楽しみー

～音読、朗読を中心にして～

国語科 渡 辺 康 英

## 1. はじめに

授業において教科書の本文を音読させることはよくあるが、あまりに平板な読み方をされると音読させる意味が減少してしまう。どのように声かけすれば読み方が変わってくるのか。総合的な学習の時間に「声の表現」という選択授業を置き、平素の国語の授業の中にどう生かすことができるかを探ってみたことについての報告を行った。

## 2. 総合的な学習の時間「声の表現」

〔目標〕人とのコミュニケーション手段としての声について考え、豊かな表現力を身につけさせる。

1学年・2学年にそれぞれ10人程度で開講している音読・朗読を中心に据えた授業である。

平成16年2月3日文化審議会答申「これからの時代に求められる国語力について」

“第3-2-(2)「話す力」について”に具体的な目安として次のようにある。

3) 発声・発音・態度などを相手や場面に応じて、コントロールできる

- ①他者の前で落ち着いた態度で話すことができる
- ②聞き取りやすい音声（声量・速さ・声の調子）で話すことができる
- ③大事なところを強調したり、間の取り方を工夫したりできる。

これらは主に発表・スピーチなどを意識したものだが、本授業の目安にもなる。また、“第3-2-(3)「読む力」について”は読解力についてのものだが、音読・朗読の目安として「読み取ることができる」「理解できる」を「表現（音読朗読）することができる」などに、置き換えると次のようになる。

(斜字が置き換えた部分)

1) 論理的・説明的な文章において、的確に表現することができる

- ①新聞や雑誌を読んで情報を正確に伝えられる
- ②文章の構成や論理の展開に沿って、内容を伝えることができる
- ③事実や意見などを区別して表現することができる

2) 文学的な文章において、気持ちや感情を表現することができる

- ①様々な描写をとらえ、内容を的確に表現できる

②登場人物に感情移入し、その心情を表現できる

④書き手の思考や心情などに迫ることができる

16年度はこれらの目安を意識し授業を展開した。

### 3. よい音読・朗読を考える上で一よくない音読・朗読

(1)声小さく聞こえない。(2)ぼそぼそ読むので聞き取りづらい。(3)早口で句読点を気にせず一気に読んでしまう。(4)つかえてばかりいる。(5)不自然なイントネーション、文末。

これらがよくない音読・朗読としてすぐに思いつくところだが、とにかく内容が伝わってこないようではよくない。どう対処すればいいのか。

教科書を読ませたときに声小さいという場合、緊張または照れがあることが多い。それとともに多くは距離感をもっていない。誰に向かって声を出しているのかという意識がない。場面によって必要な声量がある。そのつど適切な指示をしたい。ただ「大きな声で」ではなく、「黒板まで届くように」など具体的な指示をするのがよい。読むときの姿勢にも注意したい。リラックスした姿勢とともに、下を向いてのどをしめつけない読み方をさせたい。次には滑舌の問題がある。よくあるのが子音が「溶ける」という現象。「溶ける」というのは子音がはっきりせず母音だけ残ることをいう。十行の溶ける極端な例をあげると「なにいつてるの、なにかもんくでもあるの？」が「あにいつてるの、あんかもんくえもあんの？」となる。ゆっくりとはっきり読むように指示をしたい。そして、「間」の問題である。読む順番からさっさと逃れたい生徒よくみられる。間をとらないと人が聞いて理解するための意味のかたまりが大きくなりすぎてしまう。よどみなく読んでも間がなければ聞きやすい音読にはならないことを意識させたい。音読の下手な生徒はおおむね先読みが短く、意味のかたまりをつかめておらず、おかしな位置に間をおいてしまう。「読むときには次の行まで目をやって読む」ということを伝えておくだけでも間の取り方が変化する。語尾伸ばし、語尾上がりなどの不自然イントネーションは「そうならないように気をつけよう」と意識させれば直る。逆に注意しなければそのままになる。

説明文ならば内容をはっきりと伝えることが大事だし、詩や物語ならばそこにこめられているメッセージや情感まで意識して読んでほしい。なんのために読むのか、また聞くのか、目的意識を持たせたい。指名読みさせる前に全体に「漢字の読みの確認と意味のわからない語をチェックしながら聞く」「筆者が何を伝えようとしているのかおおまかにとらえる」となげかければ読み手にも目的がわかる。

音読・朗読のとき思いのほか重要なのが読み手の表情である。深刻な内容の物語を笑いながら読まれたり、楽しい内容を暗くよまれるのも困る。「読む」という行為は「伝える」行為であり、伝える人の表情と密接な関係がある。情感をこめて読みたい小説・物語などではセリフが全体の雰囲気にとって重要になる。人とふつうに話すときには自然と何かを伝えるように話す。朗読するときにも、自分がその文を話して伝えるとしたらどう話すかを意識させたい。

#### 4. 国語の授業に生かす

【3年現代文。「詩」『足と心』片桐雅夫 朗読をする中で詩を味わう】

声の表現の授業での実験を元に、現代文の授業の中で朗読を中心に据えた授業を試みた。

下読みをさせたのちに、まず指示なしで音読させる。生徒を交代させながら、「詩中の会話を会話らしくしてみよう」「感情を表現しているところを、それらしく感情をこめてみよう」「詩の中での中心部分を工夫して読んでみよう」

などのように、読み方の指示をだしていく。自分の朗読と人の朗読を聞くことにより、読み方からさまざまな理解があることがわかるとともに適宜解説を加えることにより読解も深まっていく。実験として3クラスで同じ展開ながら、差異あることをしてみた。あるクラスでは授業の様子を隠し録りした。あるクラスでは録音するよ、と宣言したが、マイクをむけることはせず録音した。もうひとつクラスではマイクを向けてみるようにした。その結果予想通りだが、マイクを向けたクラスが一番上手に、らしく朗読した。読むという意識をどのくらい持たせられるかですいふんと差が出るものである。研究発表の場でそれぞれの録音を参加の先生方にお聞きいただいた。その大きな差異を実感していただけたものと思う。

先に記した声の表現の授業参加の2年生にも同じ教材を読んでもらって録音をした。声の表現の生徒たちはものの5分ほどで相談しながら詩のテーマを見抜き、どこをどう工夫して読もうかと考え始め、10分後にはそれぞれの解釈を取り入れた朗読を開始した。朗読になれている生徒は内容理解も早い。この録音も研究発表の場でご紹介したが、音読・朗読のトレーニングをした生徒の朗読はひと味違うことを実感していただけたと思う。

現代文の教科書教材のすべてが朗読にふさわしいわけではないので、どこに朗読を取り入れるか、朗読することが効果的な教材はどのようなものがあるか、今後も探っていく必要がある。

(以上、金沢大会での発表資料を改稿した)